

『花影集』所收「劉方三義傳」の傳播について

——『燕居筆記』及び『醒世恒言』との關係を中心に——

伴 俊 典

『花影集』は明の成化年間に出版された小説集である。^①この作品は、『剪燈新話』、『餘話』などと共に明初期の文言による小説集の一つに数えられるが、むしろ個人の別集としての性格が強く表れ、その點が作品を考える上で一つの特徴となっている。

また、收められた作品の幾つかは、後代の筆記小説や地方志、筆記などに傳播し、戯曲に改編され、廣く傳わっている。特に、明代において、小説に收められる物語の傳播の経路と作品の變化を見る上で、貴重な資料となっている。

本論が注目するのは『花影集』に收められた「劉方三義傳」という一篇の物語である。この作品は幾つかの小説集に收められ、その都度若干の改編を施されながら、明末の著名な小説集『醒世恒言』に、「劉小官雌雄兄弟」と題され收められる。

その間の傳播に關わった三種の『燕居筆記』に異なるテキストで収録されているが、この三つのテキストとの比較を通して、變化の細部を検討することが可能となっている。そこで本論では、『花影集』が收める物語が、書籍を媒介として伝えられ、テキストが改められた結果、大衆の支持を得る書物に收められるべき物語となる過程を、實際のテキストの變化の調査から考察する。

一 作者陶輔と『花影集』の體裁

まず『花影集』の作者と作品の體裁を見ていく。

作者陶輔（字廷弼、號夕川）は鳳陽（安徽省）の人である。陶輔は宦家の出身で、父は武門の名家として文章にも通達した人物である。自身も陰官により任官されたが、その後時運

に恵まれず、應天衛指揮簽事で致仕した^②。後に風流人として山河をめぐり、詩文をつくり暮らすようになるが、家名を再興する望みを果たせず、失意の内に世を去った人物である。『花影集』は若い頃から好んで蒐集した異聞を基に作られている^③。

『花影集』「引」によれば、彼が正徳年間に『花影集』を成立させた後、嘉靖二年（一五三三年）、陶輔が八十三歳の時に改めて『花影集』を出版するという経緯をたどる。現在残っているのは更に時代を降った萬曆年間に崔豈立の刻した重刊本で、『花影集』が明末に流通していた痕跡を見ることが出来る。『花影集』「引」は次のように『花影集』成立の意圖を語る。

…嘗得宗吉瞿先生《剪燈新話》、昌祺李先生《剪燈餘話》、輔之趙先生《效顰集》，讀而玩之。…予不自揣，遂較三家得失之端，約繁補略，共爲二十篇。題曰《花影集》，亦自以爲得意之作也。…（『花影集引』）

陶輔は「較三家（『剪燈新話』、『餘話』、『効顰集』）得失之端，約繁補略，共爲二十篇」として、先行する三部の小説集を手本に、その得失を踏まえた上で個人的な小説観によつて

『花影集』所收「劉方三義傳」の傳播について（件）

整形して『花影集』を編んだことが伺える。

だが、作品の體裁を見ると、これが必ずしも忠實に守られていないと思われる點が見られる。以下、収録作品の傾向を検討し、その點を明らかにする。

『花影集』は長短入り交じった二十則が收められているが、幾つかの特徴によつて分類することが出来る。「退逸子傳」、「潦倒子傳」、「夢夢翁傳」などは、登場人物の人となりと、それに對する陶輔の評價を述べる内容である。これらは彼らの言行とその評價が記述の大半を占めていて、小説というには中心となるべき筋に乏しく、むしろ人物評というべき内容である。「廣陵觀燈記」、「邗亭宵會錄」などは地域の風俗を題材にしておりそこで起きた事件を記している。しかし、これも風土の紹介や考察が多く、筋に乏しい。そして、もう一つが「劉方三義傳」や「心堅金石傳」、「節義傳」など筋を持った小説で、これが後の小説集に収録されている。『花影集』の作品上の分類は、小説に類するこれらの作品によつて爲されていると言えるだろう。しかし、これらは『花影集』の重要な部分であるが、全面的な性格とはなっていない點に注目する。作品全體の傾向は、作品中の登場人物を見た場合、一層よく分かる。「退逸子傳」の退逸子のような現世を超越した仙人、

『廣陵觀燈記』の餘論のような出世に見切りをつけた在野の好學の士、「東丘公傳」の花雲のような軍人で、登場人物の職業や社會階層はほぼこの三つに集約される。いずれも軍人生活に見切りをつけて在野に遊び、學問に傾注した陶輔の人生の一面と重なる人物であり、陶輔は自らの人生觀に従つて人物を作品に投影しているのである⁽⁴⁾。

また『花影集』が『剪燈新話』等の先行する小説集と最も異なるのは、収録された韻文の多さである。韻文により物語が構成されているといえる作品もある⁽⁵⁾。四卷二十篇の作品中に、實に百以上の詩文が収められており、絶句や律詩といった近體詩はむしろ少なく、分量の大半が數十の句を連ねた長大なものである。末尾に收められる「晚趣西園記」などは、陶輔個人の別集としての性格を最もよく表している則である。「晚趣西園記」はまず夕川老人、即ち陶輔自身の人となりを紹介し、その後「晚趣西園記」と題された古文と「西園行樂詩」と題した詩二十律が列擧されているのみで、その他の人物や逸話は一切ない。今回調査したところ、韻文の使用については作中の文字數で較べればおよそ四割が韻文で、これは小説としては異例の多さであると考ええる。

『花影集』は以上の通り、陶補のいう先行する三作品に限ら

ず、明の小説全體と比しても體裁が異なる特徴がいくつも見つかると、にもかかわらず作る側はこれを小説と斷言する。萬曆に重刻された際に崔豈立の附した跋文に「…兄守嶺南之昆陽寄餘以新刻小説曰花影集…」とある。陶輔は小説『花影集』を贈つた、と述べているのである。すでに述べたとおり、『花影集』には先行する三つの小説集の得失の際だつたところを較べ、繁を約し略を補す意圖がある。しかし、序跋の記述から考えられる小説像と實際の記述には大きな隔たりがある。總じていえば、『花影集』は作品の至る所に陶輔の分身を見ることが出来、指摘した登場人物の他にも、主人公に擬せられるのは概ね彼の人生と何らかの形で類似した人々ばかりで、趙孟敬の「花影集序」に二十篇の作品のうち、十六編までが解説されているが、そこには作品を紹介することより、陶輔の人生觀に照らし合わせて選んだ意圖を述べるものが優先されていて、作品が作者本位に作られたことを強く意識させる。

二 「劉方三義傳」の他書への収録狀況

『花影集』に収録される物語のうち、完全な姿で他書に伝えられるのは「劉方三義傳」、「心堅金石傳」、「節義傳」の三作で、共に『燕居筆記』に編入されている。その中の「心堅金

石傳」は「情史」に更に編入され、その後広く流通する故事になっていく。⁶⁾その他に若干の故事の類似が見られるが、『花影集』の故事が伝えられたという確證はない。⁷⁾よって、現状においては『花影集』の故事は『燕居筆記』を通じて廣まる傳播の経路のみが現在指摘できる、ということになる。その中でも「劉方三義傳」が辿った経路に特徴が見られる。以降この作品に絞って傳播の様相を見ていこう。まずこの作品のあらすじを示す。

明の宣徳年間の初めの頃、川邊の要地として榮える河西務の村に劉という六十になる夫婦が酒店を營んでいた。ある冬十二、三の子供を連れた方勇という男が宿泊したところ、その夜中風にかかり、劉公の看病の甲斐無く死んでしまう。劉公は残った子供を劉方と名付け、養子にして育ててやった。

その後のある秋、難破した舟から劉奇とその妻李氏が助けられたが、間もなく李氏は死んでしまう。劉公は天涯孤獨となった劉奇も養子にした。

怪我の癒えた劉奇は劉公のもとを辭して故郷に歸るが、故郷は荒れ果てて埋葬してやることが出来ない。やがて歸つ

『花影集』所収「劉方三義傳」の傳播について(伴)

てきた劉奇は、劉公夫婦の死後、劉公夫婦と劉方の親、劉奇の親の三親の墓を作り、手厚く葬った。その後劉方と劉奇は兄弟協力して商賣に勤め、數年も経たずに豊かになった。

二人とも結婚を考える歳になり劉奇は劉方と共に婚姻の相談をすると、劉方は義父の死後約束した不婚の誓いを盾にいい顔をしない。劉奇は知人に相談して媒婆を劉方のもとにやっだが断られてしまう。しかしその後壁に書き付けられた詩によつて劉方が實は女性であつたことが分かり、二人はついに結婚した。

というものである。

この物語は『醒世恒言』に收められるまでに更に多くの書物に受け継がれたが、現在でもそのうちの幾つかは見ることが出来、話柄の成立から明末まで、明一代を通じて物語がたどった経路を追うことが出来る。その傳播をテキストの比較により見てみる。現在確認されている劉方三義傳故事の収録書は以下の通りである。

『花影集』(明成化、弘治年間)、『燕居筆記』三種(萬曆年間)、『玉芝堂談薈』(萬曆年間)、『繡谷春容』(一五九七前)、『情史』

(天啓年間)、『醒世恒言』(一六二七)、『堅瓠集』、『堅瓠續集』(清)、『耳談類増』、『遠山堂曲品』、『奩史』、『古今情海』(清)、『古今閨媛逸事』⁸⁾

このうち最も早い記録は『花影集』で間違いないが、伝える物語の系統は幾つかに別れ、記述された文章の類別によって三つに分けられる。一つは『花影集』を忠實に踏襲した『燕居筆記』で、これを「劉方三義傳」系と假に名付ける。一つは、『玉芝堂談會』、『奩史』、『順天府志』の地方志等に記された傳わったもので、これを「地方志系」と假に名付ける。ひとつは『繡谷春容』や『情史』などの筋を節略したもので、これを「節略系」と名付ける。これをテキストの繼承關係から、『醒世恒言』に至る過程を見ていく。『花影集』に収録されたテキストを忠實に繼承しているのは『燕居筆記』で、「劉方三義傳」系はすなわち『燕居筆記』のみといつてよい。地方志系は筋は同一であるが、字句の異同を追うほど類似してはならず、これにより『醒世恒言』が作られたとは語句の一致が見られない点から見ても、『燕居筆記』との類似點は見られない。又、節略系のうち『醒世恒言』ともつとも出版關係が近いとされる『情史』は、詩句の異同、および『花影集』、『燕居筆記』にある方勇の名が『情史』にはなく、『醒世恒言』に

はあるなど問題がいくつかあり、直接の關係を指摘できない。『繡谷春容』に關しては該書の成立に未だ不明の點が多く、經路のいずれの位置に置か確定することが困難であるが、収録された三種の詩句の異同を見れば『燕居筆記』以降のテキスト(恐らく、後述の林近陽本か、餘公仁本のテキストであろう)を見て節略したものであることは明らかである。しかし『醒世恒言』に到る筋を追う場合、同じ節略系とした『情史』のもつ筋立てよりも更に節略したものであるため、これをもとに『醒世恒言』の話を作つたとは思われない。ならば、現時點において『醒世恒言』の筋を構成する要素を最も多く持っている『燕居筆記』が『花影集』と『醒世恒言』を結んでいく可能性が高いのである。

しかし、これまで論じられてきた『燕居筆記』の収録狀況⁹⁾は、『燕居筆記』同士の關係を明らかにしておらず、傳播の經路を考える上でなお未解決の問題を残したままとなっている。今回調査したところによれば全ての『燕居筆記』に異なるテキストで収録され、互いに繼承關係が成立することが分かった。現在『燕居筆記』と呼ばれるテキストは三種あり、一つが何大掄本『燕居筆記』、一つが林近陽本『燕居筆記』、一つが餘公仁本『燕居筆記』である。¹⁰⁾何大掄本の『燕居筆記』に

は卷七下層「記類」に『花影集』から引いた三編がまとめて収録されているが、林近陽本『燕居筆記』第九卷下層、餘公仁本『燕居筆記』第九卷下層のいずれにも「劉方三義傳」としてこの物語が収められている。全てのテキストに字句の相違があり、一箇所ではあるが筋の改編も見られ、単純な引き寫しでないことから、「劉方三義傳」故事、ひいては『花影集』の繼承経路を示す具體的な證據になる。それらを比較した結果、話の發生時點に最も近い『花影集』のテキストからまず何大掄本の『燕居筆記』が物語を収録し、その後林近陽本、餘公仁本と傳播していった経路が明らかとなった。その後、多くの書籍にこの話は収録されるが、その中で、『醒世恒言』に収められた物語の直接の來源が林近陽本もしくは餘公仁本の『燕居筆記』所收の「劉方三義傳」である可能性が強い點が注目される。これは最後の部分で「産業」の語を使っているが、この語は『花影集』にも出てこず、これが話柄の具體的な比較に意味をもたらすものになると考えている。

次に、実際にテキストを比較してみていく。

三 「劉方三義傳」の『燕居筆記』との比較

現在、我々が見ることの出来る『燕居筆記』は三種あり、

『花影集』所收「劉方三義傳」の傳播について(件)

そのいずれにも「劉方三義傳」が収録されている。これはすでに胡士瑩が述べているとおりであるが、胡氏は餘公仁本『燕居筆記』については述べているが、林近陽本については収録の指摘をしていない。しかし、以下述べる通り、これを同一のテキストと見るには問題がある。本節では『花影集』と三種の『燕居筆記』のテキストの關係がどのようなものであるかを見ていきたい。

『花影集』の「劉方三義傳」と『燕居筆記』の「劉方三義傳」とは、基本的に同一の物語である。ただ、『燕居筆記』三種のそれぞれのテキストには字句の異同が認められる。恐らくこの三種のテキストには一定の書承關係があると思われる特徴があるが、その中で、何大掄本が『花影集』と最もテキスト一致部分を有しており、『花影集』を直接繼承したのはこの書になると考えられる。

まずは本文テキストの文字の異同から各テキストの關係を明らかにする。三種の『燕居筆記』のうち何大掄本を(A)、林近陽本を(B)、餘公仁本を(C)と便宜的に呼ぶこととする。そしてテキスト改編の特徴を三つに分け、多く見られる改編から順に見ていく。

花影集	燕居筆記(A)	燕居筆記(B)	燕居筆記(C)
是年、有京衛老軍方其姓者、攜一子年約十三、宿於叟店。及夕、方偶得中風、至曉則頽然不起。其子悲號近絕者數肆、叟媪亦爲之墮淚、遂養於其家。凡百粥疾於家。凡百粥欲湯藥、叟媪皆爲之辨給。不半月、則老軍死矣。其子跪告於叟媪曰、念兒亡父本某衛軍、於某年母已先故、與父原籍、求少盤費、爲辦母喪、爲母喪、不料皇天弗祐、父更路亡。遺兒一身、囊無半錢之資、大恩借數尺之士、暫掩父骸、兒願終身爲奴、以償此德。如不見允、則投身此河、求爲不孝之鬼矣。	是年、有京衛老軍姓其方者、攜一子年約十三、宿於叟店。及夕、偶得中風疾、至曉頽然不起。其子悲號、叟媪亦爲之墮淚、遂養於其家。凡百粥欲湯藥、叟媪皆爲之辨給。不半月、則老軍死矣。其子跪告於叟媪曰、念兒亡父本某衛軍、於某年母已先故、與父欲投原籍、求盤費、爲辦母喪、爲辦母喪、不料皇天弗祐、父更路亡。遺兒一身、囊無半錢之資、大恩借數尺之士、暫掩父骸、兒願終身爲奴、以償此德。如不見允、則將身投河、永爲不孝之鬼也。	是年、有京衛老軍姓方者、攜一子年約十三、宿於叟店。及夕、偶得中風疾、至曉頽然不起。其子悲號、叟媪亦爲之墮淚、遂養於其家。凡百粥欲湯藥、叟媪皆爲之辨給。不半月、則老軍死矣。其子跪於叟媪曰、念兒亡父本是衛軍、於某年母已先故、與父欲投原籍、求盤費、爲辦母喪之資、不料皇天弗祐、父更路亡。遺兒一身、囊無半錢之資、大恩借數尺之士、暫掩父骸、兒願終身爲奴、以償此德。如不見允、則將身投河、求爲不孝之鬼也。	是年、有京衛老軍姓方者、攜一子年約十三、宿於叟店。及夕、偶得中風疾、至曉頽然不起。其子悲號、叟媪亦爲之墮淚、遂養於其家。凡百粥欲湯藥、叟媪皆爲之辨給。不半月、則老軍死矣。其子跪於叟媪曰、念兒亡父本是衛軍、於某年母已先故、與父欲投原籍、求盤費、爲辦母喪之費、不料皇天弗祐、父更路亡。遺兒一身、囊無半錢之資、大恩借數尺之士、暫掩父骸、兒願終身爲奴、以償此德。如不見允、則將身投河、求爲不孝之鬼也。

表に示したものは、冒頭の申兒(劉方)の父方勇が劉公の酒店で亡くなる部分で、この一節を例にとって三つの改編の特徴を検證する。

『花影集』と三種の『燕居筆記』のそれぞれの改編で一番多い例は、『花影集』のみ記述が異なり、(A)、(B)、(C)が一致する相違である。提示した比較表では、父が劉公の酒店でたおれ、子が嘆く場面にあられる。この一節では『花影集』が「其子悲號近絶者數肆」であるのに對し、(A)、(B)、(C)は共に「其子悲號」と改めている(表に一重線によって示した)。

次によく見られるのは『花影集』と(A)が異なり、(A)と残りの(B)、(C)が異なるものである。これは挙げた表では方老軍の紹介部分に見られ、『花影集』では申兒の父を「有京衛老軍方其姓者」と記しているが、これを『燕居筆記(A)』では「有京衛老軍姓其方者」と改めている。『燕居筆記(B)』および『燕居筆記(C)』では「有京衛老軍姓方者」と改め、『花影集』と(A)と(B)、(C)共に異なるテキストが書かれていることが分かる(表に二重線によって示した)。

そしてもう一つの改編例は、『花影集』と(A)が同一で(B)、(C)と異なるが、(B)、(C)は一致するものである。

これは表では父が亡くなる部分に現れ、『花影集』は「不半月、則老軍死矣」で、(A)は同じく「不半月、則老軍死矣」とするが、(B)(C)は「不半月、老軍死矣」と改めていて、『花影集』と(A)は合致するが、(B)、(C)との間に異同が存在する(表に点線によって示した)。

以上例に挙げた部分と同じ改編の特徴が物語全體に現れ、これらの特徴は各テキスト間の相違を表しているものと判断できる。その特徴を総合すると、『花影集』を(A)が改め、その部分を(B)、(C)が踏襲するが、それ以外の部分で(B)、(C)のみが改めた部分が多数存在する。つまり『花影集』のテキストを(A)がまず改め、それを使って(B)、(C)がテキストを更に改めるテキスト改編の流れはほぼ間違いないであろう。

次に胡士瑩の指摘していない(B)と(C)のテキストの異同をさらに詳しく見てみる。

花影集	燕居筆記(A)	燕居筆記(B)	燕居筆記(C)
奇亦驚悚。叟復曰、若信然、爾方爲兄、弟亦要同、乃義、守此薄産、足以業生矣。	奇聞之亦自驚悚。叟復曰、若信然、奇爲兄、弟亦要同、心、亦乃共議、守此薄産、足以業生矣。	奇聞之亦自驚悚。叟復曰、若信然、奇爲兄、弟亦要同、心、亦乃共議、守此薄産、足以業生矣。	奇聞之亦自驚悚。叟復曰、若信然、奇爲兄、弟亦要同、心、協力共議、守此薄産、足以業生矣。

『花影集』所収「劉方三義傳」の傳播について(伴)

この場面は、劉奇が父母の遺骨を山東の故郷に持って歸るが、川の氾濫により壊滅した村には墓を作れず、結局歸ってくる場面である。ここにおいて(A)と(B)は「弟兄」、「亦乃共議」とするが、(C)はそれぞれ「兄弟」、「協力共議」に作り、(A)と(B)の改編箇所が一致する(表に一重線によって示した)。その他に部分においても(A)を見ない限りそうはならないと思われる字句の改編が(B)に見られる例が多く、逆に(B)と(C)は、誤字、誤刻といったテキストを引き寫す際の誤りに止まらないテキストの異同が存在することが分かる。

つまり上述の結果をまとめると、『花影集』をそのまま引いて來たと思われる三種の『燕居筆記』のテキストは、改編箇所と比較によって、何大掄本がまず『花影集』を引き寫し、何大掄本の改編を含む形でもう一度林近陽本が再度引き寫し、更にもう一度餘公仁本がそれを包含する形で改めているという状況が明らかになる。

ではこれがテキスト改編にどういった影響を與えているのだろうか。上記の例を見ても『花影集』には表現の不備が少なからず存在し、その部分を改めた上で何大掄本『燕居筆記』が収録している。だが何大掄本の文字の校訂は完全ではなく、

それを林近陽本や餘公仁本で、更に改めているというものが改編の基本的な姿勢であろう。つまり『燕居筆記』における「劉方三義傳」の繼承はほぼ忠實に原文を載せているという方針が貫かれているわけであるが、ただ一箇所『花影集』の筋を改めている部分があり、一節を挙げて検討を試みる。

花影集	燕居筆記(A)	燕居筆記(B)	燕居筆記(C)
一日、奇瘡少愈、告於叟媪曰、奇疾雖痊、然一貧疾雖痊、然一貧欲先負父歸、再欲先負父母骨骸、恩、容奇喪完別、爲報答。叟曰、噫、路遠孤行、況子幼弱、非佳圖也。吾有一驢、久蓄無用、贈子	一日、奇瘡少愈、告於叟媪曰、奇疾雖痊、然一貧欲先負父歸、再欲先負父母骨骸、恩、容奇喪完別、爲報答。叟曰、噫、路遠孤行、況子幼弱、非佳圖也。吾有一驢、久蓄無用、贈子	一日、奇瘡少愈、告於叟媪曰、奇疾雖痊、然一貧欲先負父歸、再欲先負父母骨骸、恩、容奇喪完別、爲報答。叟曰、噫、路遠孤行、況子幼弱、非佳圖也。吾有一驢、久蓄無用、贈子	一日、奇瘡少愈、告於叟媪曰、奇疾雖痊、然一貧欲先負父歸、再欲先負父母骨骸、恩、容奇喪完別、爲報答。叟曰、噫、路遠孤行、況子幼弱、非佳圖也。吾有一驢、久蓄無用、贈子

表に示したのは川の氾濫により難破した舟から助けられた劉奇が、傷が癒え、両親の遺骸を故郷の山東に戻しに行く場面

である。『花影集』では別れを告げた劉奇がある日突然去っていくことになる。しかし(A)ではそれを示す「一日、忽失奇所在、叟等惋嘆累日、亦無如之何」が削られ、彼の行動が劉公や劉方の知る所ではなかった、とする記述が無くなったのである。(B)と(C)はそれを更に節略した形で「遂辭而往」の句を削るが、これによって劉奇が突然劉公のもとを去るといった筋の改編に繋がるものではなく、故にこの部分によつて、(B)および(C)は(A)の引き寫しに過ぎないと判断する材料とならう。

つまり、三種の『燕居筆記』のテキストを比較してみると、三種のそれぞれのテキストが、字句の異なる範囲を超えて改編されており、テキストを繼承していった一定の経路が存在することが明らかとなる。ただ、その改編には各本の特徴があり、何大掄本が筋を含めて最も大きく變えているが、林本、餘本はその引き寫しにすぎないという態度の相違が明らかになるのである。だがこの段階では『花影集』の本文を確認できるくらい類似している。劉方の物語が大きく變化するのは『醒世恒言』へ収録される段階である。次に『醒世恒言』へ収録するに際しての改編の特徴を検討していく。

四 「劉方三義傳」の『醒世恒言』との比較

『醒世恒言』は天啓年刊に出版された白話による短編小説集である。編者馮夢龍はそれまでに二篇の同様の小説集を編んでおり、併せて「三言」と呼ばれている。しかし『燕居筆記』が引いた「劉方三義傳」を収める『醒世恒言』は他の二作品と利用書籍の傾向に顕著な差異を有している。『醒世恒言』に現れて他の「三言」に現れない書籍は『花影集』の他、『厚德錄』や『括異志』、『玉芝堂談會』などがあり、それらの共通する性質は明代に生まれた筆記、もしくはそれに倣った小説である。これらが新たに加わったことで、『醒世恒言』は他の二作に比べ出版時期に近い書籍の利用が多いという性質が加わり、広く傳播している著名な作品を収めるという性質が失われている。

本作は以後の『玉芝堂談會』、『古今閨媛逸事』、『古今情海』、『堅瓠集』、『堅瓠續集』などに傳播した⁽¹²⁾。その後胡士瑩はこれに増補する形で戯曲には明人の「三義記」雜劇、范文若「雌雄旦」傳奇、清人「彩燕詩」などがこの故事を演じたことを指摘している⁽¹³⁾。これは成立を考えると、山東にあった實事がたまたま文人の筆によって録せられ、やがて著名な書籍に流

『花影集』所収「劉方三義傳」の傳播について(件)

通したことをきつかけに、劇化される故事へと成長していく典型的な例であるだろう。そのきつかけとなったのが『花影集』で、中心となったのが『醒世恒言』であることは既に明らかになっているとおりである。

男装の女性が性を偽って男性社会に入り、のちにそこで友情をかわした男に正體を明かして結婚するという話の設定自體は古くから中國にある話である。しかし、この話は『花影集』の成立とほぼ同じ時代の年代が書中にあり、同時代の記録であることが明らかであり、しかも清代に入っても小説や地方志、戯曲など、廣汎な書籍に傳播していることから考えると、「劉方三義傳」自體が人々の支持を得ていたと考えてよいだろう。では一つの事件が小説集に編入して、人々の支持を受ける物語となった理由はどこにあるのか考えてみたい。

『花影集』と『醒世恒言』に描かれる劉方の物語はほぼ同一の筋を持つているが幾つか異なる部分がある。それを検討していくと、この物語が互いに異なる意圖で記されていることが分かる。次にこの點を中心に見ていきたい。

實際に改められているのは以下の二點である。一つは會話の増補、もう一つは人物關係を變えることによる筋の改編である。

まず、一つめの會話の増補の部分を確認すると、以下のようになる。前半部分、劉公のもとに劉方、劉奇が身を寄せることになるいきさつを述べた部分で、特に人々の會話部分が創作されている。方勇、申兒を迎える際の劉公の言葉、劉奇が旅立つに際しての劉公の言葉、また、後半部分の劉奇の縁談に際しての欽太郎の言葉など、それぞれの場面において、人物の會話に増やされた部分が存在する。しかしこれは話の大筋を直接變化させるものではなく、大體が筋を語る上で不明であつた部分を會話によつて補うといった類のものであろう。

もう一つの點は人物の形象を變化させて筋を改める改編である。これは前半部分と後半部分に一つづつ存在する。一つは劉奇が難破船から助け出される場面で、『花影集』では劉奇と妻が助け出され、妻は劉奇を劉公らに託して死亡する。しかし『醒世恒言』では、妻自體出てこず、彼が未婚であるかのごとき描寫がなされている。これは『花影集』の末に三人の親の墓を並べて建てる場面に妻の墓に關する記述が出てこないため、筋の整合性を重んじた馮夢龍の編集によつて改編されたものと思われる。更に後半部に新たな登場人物が現れ、筋が改められている部分がある。その部分を原文を引いて確認したい。それは義父劉公が亡くなり、兄弟が商賣に成功し

た後、劉奇、劉方兄弟が適齡期の獨身ということと結婚を考へるようになる場面に見られる。まずは元となつた『花影集』の該當部分を引く。

一夕、兄弟夜酌窗下。…奇曰、此皆予二人微誠感格、實蒙天相。然予今年二十有二、弟亦一十有九、俱未議婚。況人之壽夭莫期、萬一不諱、則三宗之祀淪矣。若乘時各求良配、或有所出、豈不休哉。方愀然不答、良久徐曰、兄忘之乎。初義父臨終時、弟與兄在誓、願各不娶、今何更發此言。…

ここで劉方が亡父劉公の臨終の際の誓いを出して結婚を反對している描寫に注目し、次に『醒世恒言』の該當部分を見てみる。

劉奇勸道、賢弟今年一十有九、我已二十有二、正該及時求配、以圖生育、接續三家宗祀、不知賢弟爲何不願。劉方答道、我與兄方在壯年、正好經營生理、何暇去謀此事。況我弟兄向來友愛、何等安樂、萬一娶了一個不好的、反是一累、不如不娶爲上。劉奇道、不然…

こちらでは劉方の言葉に靈前の誓いは出てこず、家業の忙しさに加えて、不出来な女房を娶ることによって兄弟の間に問題が発生することを心配したものになっている。

次にしびれをさらした劉奇が友人と結婚話を相談する場面を見てみる。まずは『花影集』の場面を見てみる。

一日、奇於知厚處話及茲事，其友曰，我得之矣。令弟意謂彼與賢契立家在先，恐欲先娶爾。奇曰，吾弟端仁，決無此心。君既爲謀，試一驗之。遂密令二媒私見於方曰，某家有女，年正與二官人同，良淑工容絕於一時，實佳配也。某等敬議此婚，特別有年齒長者，然後再議大官人之婚未晚。方勃然作色曰，何物老嫗，欲離間吾昆弟耶。急去，勿令吾責也。二媒愧赧而去，密告於奇。奇等百方思度，終莫得其主意。

ここでは劉奇が「其友」と劉方の結婚話を相談し、媒婆を方のもとにやって婚姻を整えようとする場面であるが、劉方は色をなして反發する。一方、『醒世恒言』は次のようにしている。

一日，偶然到一相厚朋友欽大郎家中去探望。兩個偶然言及姻事，劉奇乃把劉方不肯之事，細細相告，又道，不知舍弟是甚主意。欽大郎笑道，此事淺而易見。他與兄共創家業，況他是先到，兄是後來，不忿得兄先娶，故此假意推託。劉奇道，舍弟乃仁義端直之士，決無此意。欽大郎道，令弟少年英俊，豈不曉得夫婦之樂，恁般推阻。兄若不信，且教個人私下去見他，先與之爲媒，包你一說就是。劉奇被人言所惑，將信將疑，作別而回。恰好路上遇見兩個媒婆，正要劉奇家說親，所說的是本鎮開綢緞店崔三朝奉家。敘起年庚，正與劉方相合。劉奇道，這門親，正對我家二官人了。只是他有些古怪，人面前就害羞。只悄悄地對他說。若說得成時，自當厚酬。我且不歸去，坐在巷口油店裡等你回時，他喉急起來，好教媳婦們老大沒趣。不一時回復劉奇道，二官人果是古怪。老媳婦恁般攛掇，只是不允。再說時，他喉急起來，好叫媳婦們老大沒趣。劉奇方才信劉方不肯是個真心。…

この場面で劉奇は友人の欽大郎に、劉方が縁談に對して不満を持っている事を相談する。『花影集』の「其友」に相當する欽大郎が一計を案じて婚姻話を持ちかけるが、この場面に

登場するのは欽大郎と劉奇のみで、劉方は出てこない。當然、彼の發言も全て省かれている。『花影集』では兄弟の對話、特に劉方の發言に現れる孝義が強く表される場面であるが、『醒世恒言』では新たな解釋を加えている。

それは欽大郎が加わったことよって劉奇、劉方の對立がより緩和された點に現れている。つまりここではより兄弟の結びつきが強くなっているのである。『花影集』では家業を思い婚姻を進めようとする劉奇と、それを親との義心により反對する劉方との對立が、特に劉方の反發の言辭に現れていた。だが、『醒世恒言』では欽大郎が婚姻を推進する側の功利的な思惑を引き受けるために、劉奇は弟思いの實直な性格が強く表れている。だが、『花影集』での劉奇が決して實直なだけの人物ではないことは、既に述べたとおり劉公の恩義を振り拂い、両親の遺骨を持つて故郷に戻つていった描寫からも明らかで、『花影集』と『醒世恒言』との間にある二つの改編箇所は、こうした劉奇の性格を變化させる點で共通した役割を擔っているのではないだろうか。それは兩者の題目の相違からも推測できる。『花影集』の故事に付された題は「劉方三義傳」とあり、劉方の三親に對する孝義を表し、『醒世恒言』に付された題は「劉小官雌雄兄弟」とあり、雌雄、兄弟共に劉奇と

劉方の二人を指す。つまり劉方一人の物語から劉兄弟という家族でもあり、兄弟でもある二人の物語へと變化させるところに、改編の基本的な傾向があるのではないだろうか。そう考えると、救ってもらった恩を振り拂い、婚姻をめぐつて商業的な打算を強く出す劉奇は必要ではなく、三親全てに孝義を盡くそうとする劉方と同じ情を示す必要があつたのだろう。

以上テキストの分析を通して『花影集』から『醒世恒言』へと至る物語の傳播の経路を『燕居筆記』を中心に追つてみた。傳播の上で同一のものと考えられて見過ごされていた『燕居筆記』のテキストが、その版本間でテキストに異同を生じていることが明らかとなつたことは今後の検討に意味を持つものとなろう。そして故事が『醒世恒言』に到るまでの過程を追つていくと、『花影集』が元々持つていた劉方一人の人物を顯彰する物語から、題目に示されるとおり、より家族の情を前面に出し、一家で劉方の示した孝義を共有する作品となっている特徴が、特に改編部分の傾向から強く讀み取れるものになつていた。つまり『醒世恒言』が明初の傳奇小説を取り入れる際、原初の形式を取つていた『花影集』の表現は、その骨子を殘して新たな意圖を植え付けられたと見ることが出

来るのではないか。その傾向が個人的な人物故事から家族の間で一つの情を共有する傾向があることは『拍案驚奇』の改編にも見られ、非常に興味深い問題である。その意味で、『花影集』は伝えられた故事が文字化された最初の姿を留め、又、それが明を通じてどのように傳播していったかを知ることの出来る非常に貴重な作品であることが分かるのである。

今後の課題としては、馮夢龍の記した「劉小官雌雄兄弟」が戯曲に及ぼした影響がいかなるものであるかを検証する作業が残されている。本論において比較したのは「劉方三義傳」が『醒世恒言』に收められる過程とその實態に關する一調査であり、これは「劉方三義傳」の變化の過程のいわば前半部分に關わるものでしかない。今後は傳播の後半に當たる明末に廣く讀者を得た物語が戯曲に改編される過程にどのような改編が存在するか、具體的にテキストを検證して明らかにする必要がある。これに關して地方志に記された「三義傳物語」との關連が重要な問題となる。これまで見てきたとおりこの物語は『花影集』が最も早く記録し、それを『燕居筆記』が記録したために、それを参照した『醒世恒言』に收められた経路を辿るが、それとは別に地方志に残された劉方物語が清朝まで受け継がれていた記録が存在する。清の光緒年間に

『花影集』所收「劉方三義傳」の傳播について(伴)

出版された『順天府志』が『武清吳志』を引く形でこの物語を収録しているが、そこに収録された詩句が『花影集』のものと完全に一致するという特徴をもつ。この詩句は何大掄本『燕居筆記』の時にすでに字句を改めており、それを踏襲した『醒世恒言』も字句は異なっている。つまり、清末の段階で、白話小説の傳播に頼らず劉方の物語が二つの経路を辿って傳えられたことになるのである。果たして『醒世恒言』以降の劉方物語はどちらを繼承していたのが今後の検討課題となる。これを明らかにすることによって、「劉方三義傳」の話譚が発生してから明清に到るまでの経路を明らかにすることが出来るであろう。

注

- (1) 『花影集』の所蔵は現在確認されているものは、高麗使が中國より持ち歸った崔豈立の重刊本が日本に傳わり、早稻田大學に所蔵された一本しかない。以下小論で扱う『花影集』のテキストは全てこの崔豈立重刊本を使用する。
- (2) 夕川居士こと陶輔が應天衛指揮簽事で致仕したことは『明史』巻第一三五、『百川書誌』巻十八などに載せられている。しかし陶輔の生平は史傳の記載が無く、嘉靖二年に八十三才であったこと以外未だ分からないことが多い。

- (3) 「蓋公之先人以大功烈擢大同伯，公以貴遊子薄武藝而不事，專志於經史翰墨間，其蓄之深固有自矣。暨襲應天親衛昭勇之爵，又不苟合於時，即丐恩休致，尋山玩水，以豁其趣；操觚染翰，以肆其博；尚友古人，樂觀時變，以極其情。少有餘暇而作是集，抑亦嘲弄風月之一唾耳。」（『花影集』序）
- (4) 陶輔の生平については程毅中「陶輔評傳」（『明清小説研究』一九九九年、第四期）がある。『花影集』と作者陶輔の思想については、陶輔の父陶信と、彼が武官の名門として生まれた特殊性から論じた喬光輝「陶輔『先人』生平事跡考 兼論對『花影集』的影響」（『明清小説研究』二〇〇五年第一期）がある。
- (5) たとえば「丐叟歌詩」は主人公の偶然であった丐叟が作った七言を六十四句連ねた歌が引かれるなど、大半が韻文で出来た話であるが、程毅中はこの則と『金瓶梅詩話』第九十二回との物語の類似を指摘し、韻文によって構成された故事が章回小説に取り込まれていることが分かる。
- (6) 「心堅金石傳」、「節義傳」の流傳の状況に關しては、楊緒春「從兩個故事看《花影集》、《緬谷春容》和《重刻增補燕居筆記》及其與《百家公案》的關係」（『明清小説研究』二〇〇三年第三期）があり、二つの故事が『燕居筆記』を通じて広く傳播し、『百家公案』の話の元になったとする説を述べている。
- (7) 例えば「東丘公傳」は明の名將花雲の逸事を述べたものである。花雲は『英烈傳』などに登場する太祖朱元璋を補佐した明代でも指折りの名將であるが、「東丘公傳」はそれらに散見する朱元璋と出會った後の、いわば後半生の物語の他に、彼が弱冠
- ですでに盜賊を討伐した事跡などより詳しく述べられている。
- (8) これらの調査は、『三言二拍』の來源を研究した成果をまとめた小川陽一『三言二拍本事論考集成』（新典社、一九八一年）をもとに、論者の調査によって新たに判明した書籍を加えたものである。その詳細は、『三言二拍』の各巻の話柄に關わる書籍をまとめ、論考を準備中であり、そこで改めて論じたい。
- (9) 『花影集』と『燕居筆記』との關係を最初に指摘したのは葉德均「三言二拍來源考小補」（『戲曲小説叢考』中華書局、一九七九）であるが、ここでは『燕居筆記』とのみ載せられ、胡士瑩が「明代擬話本故事的來源與影響」（『話本小説概論』中華書局、一九八〇）において何大掄本及び林近陽本『燕居筆記』に載せられることを指摘する。
- (10) 現存する三種の『燕居筆記』はいずれも日本に所藏されており、それぞれ内閣文庫藏何大掄編『新刻增補燕居筆記』十巻で、小論では何大掄本と稱する。内閣文庫藏林近陽編『重刻增補燕居筆記』で林近陽本と稱する。もう一本は宮内廳書陵部藏の餘公仁編『增補批點圖像燕居筆記』で、小論では餘公仁本と稱す。
- (11) 前出胡士瑩「明代擬話本故事的來源與影響」を参照。
- (12) 前出小川陽一「三言二拍本事論考集成」を参照。
- (13) 前出胡士瑩「明代擬話本故事的來源與影響」を参照。
- (14) 『拍案驚奇』の改編姿勢が家族の情義を中心としている側面があることについては、論者は既に『拍案驚奇』の人物配置——故事引用の姿勢を中心に——（『日本中國學會第58回大會、2006年10月』）に口頭發表をしている。